

日本・中国の説明文の授業

——「五つの提案」にもとづいた指導——

岡 卓志

はじめに

先行研究などをもとにPIISA型「読解力」と従来の読解力との類似点と相違点について検討し、読みの授業に取り組むための「五つの提案」をした(以下、「五つの提案」)^①。その五つとは「必要な情報をみつける」「根拠・理由・意見の三点セット」「討論・対話の必要性」「批判的な読み・評価的な読み」「読書量を増やす」である。

ところで、「五つの提案」を研究していた際に、中国の教科書に掲載されている説明文を読む機会があった。説明文でも日本と中国とでは説明の仕方が全く異なる。

そこで、この日中の説明文を使い「五つの提案」を取り入れた授業ができると考えた。

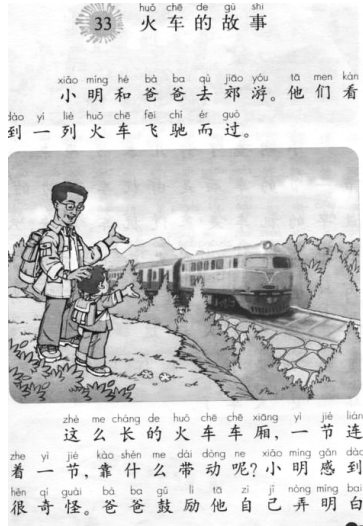
本稿では、平成二十二年、安来市立飯梨小学校六年生・八名に行った実践を紹介する。

一 説明文を読み比べる・読み広げる

1 中国の説明文を読む

今回、使用した「中国の説明文」は、一年生の教材『火车的故事』である^②。

中国の教科書を見たことがない子どもたちのために、原文をそのまま読ませ、感想を聞いた。



(『火车的故事』の冒頭部分を転載)

※〈板書記録1〉

中国の説明文『火车的故事』を見て思ったこと

- ・ 列車・新幹線など絵がある。写真のようだけど、写真ではない。
- ・ 絵がとてもうまい。
- ・ 乗り物のことが書いてありそう。
- ・ 日本の漢字と違う字がある。
- ・ アルファベットが書いてある。

まず、挿絵のうまさ指摘した。この挿絵から説明文の内容が「列車・新幹線」「乗り物」であると判断した。

また、「日本の漢字と違う字」と表現した簡体字。「アルファベット」と表現したピン音についてもあげていた^③。しかし、これ以上、内容を理解することができなかった。

2 中国の説明文(訳文)と日本の説明文との比較

次に、『火车的故事』の日本語訳『汽車の物語』を読ませた^④。比較のために「乗り物」をあつかった日本の説明文『はたらくじどう車』(二年生)を読ませた^⑤。

本実践では、書いてある内容を読んで理解するだけでなく、日本と中国の説明文がそれぞれ「どのような書き方をしているのか」ということを観点にして読ませた。子どもたちの発言を書き留めた板書記録である。

※〈板書記録2〉

日本と中国の特徴

日本の説明文

『はたらくじどう車』

- ・写真が使っている
- ・じどう車だけの内容
- ・同じようなこと(ことば)の繰り返し
- ・パターン

バスの説明

ですから

特長

もうひとつの説明

- ・段落一つあき
- ・句読点
- ・縦書き
- ・欄外に漢字の説明がある

絵と写真、縦書きと横書き、句読点とコンマなどの違いを指摘した。そして、日本の説明文は「同じようなこと(ことば)の繰り返し」「パターン」、中国の説明文は「人を使っている」「物語の中に特長を入れている」「物語みたい・感想文みたい」と指摘した。

そこで、『はたらくじどう車』のように「パターン」で書かれている説明文を「日本型」、『汽車の物語』の

中国の説明文

『汽車の物語』

- ・文章が長い
- ・絵がうまい
- ・人を使っている
- ・明(めい)ちゃん・お父さん
- ・物語の中に特長を入れている
- ・物語みたい・感想文みたい
- ・段落二つあき
- ・横書き
- ・「？」、「！」、「」を使っている

説明文のように「物語みたい」になっているものを「中国型」として授業をすすめた。

3 科学絵本を読む

—「日本型」「中国型」に着目させた読み—

続いて、他の作品を読み広げる学習として科学絵本を読ませた。パターンで書かれた「日本型」、物語のような「中国型」を読むときの観点にした。

実践校には、『月刊 科学絵本「かがくのとも」』

⑥(以下、『かがくのとも』)が三十冊ほどあった。そのうち十冊以上を読むようにした。「日本型」と「中国型」に最も近い書き方と思った科学絵本を一冊ずつ選ばせ、簡単な紹介文を書かせた。できあがった紹介文は他の子に読ませ、感想を書かせた。以下、その紹介文と感想である。

○「日本型」として紹介された科学絵本の例

A児の紹介文

紹介する科学絵本『なにかがいる』^⑦

・全部、写真だし「なにかがいる」と毎回かいてあるから。パターンだから日本型にしている。

「なにかがいる。」↓「このあいだになにかがあった？」ショウリョウバッタの写真「答えとパターン」になっいて日本型になっいてる。

A児の紹介文に対する感想

- ・「写真が使っている」やパターンになっているから日本型でいい。
- ・写真だけだし、「このあいだにながかった。」↓答えというパターンになっているから、日本型でいいと思う。

○「中国型」として紹介された科学絵本の例

B児の紹介文

- 紹介する科学絵本『みんなでうどんづくり』^⑧
- ・中国型だと思う。主人公などがでてくるのが中国型だから。『うどんづくり』は、「あきこちゃん」と「きぬこちゃん」という人がでていて中国型です。

日本型は、人が話しているのではないけど、『みんなでうどんづくり』は「（かっこ）が使っている。話がいつばいあるのに、説明になっているからです。

B児の紹介文に対する感想

- ・「あきこちゃん」「きぬこちゃん」など例を出してわかりやすい。理由が書いてあってわかりやすい。
- ・日本型と中国型でくらべて「『みんなでうどんづくり』は「（かっこ）が使っているから」「話がいつばいあるのに、説明になっているから」と中国型の特ちょうを見つけていいです。

4 「五つの提案」を視点に分析

―「批判的な読み・評価的な読み」

「読書量を増やす」について―

これまでの説明文の授業では「内容を理解する」「段落を内容ごとにまとめていく」のように「読解」を中心とした学習が多かった。

本実践では、それぞれの科学絵本を「パターンで書かれている日本型」「物語のように書かれた中国型」のように「書き方を評価」をしながら読んでいく。これが「批判的な読み・評価的な読み」になる。説明文や本の「書き方」を「評価」しながら読む授業はあまり行われていない。

「読書量を増やす」については、『かがくのとも』を十冊以上読ませたことにある。本来は、子どもが本を自主的に進んで読むことが理想的である。しかし、日本の子どもたちは読書の有用性がわかっている^⑨。また、実践校では、普段本を読んでも科学絵本を手にとったことがないという子どもが多かった。

本実践のように「授業の中で本を読まなければならぬ状況を意図的に仕組」まなければ「読書量を増やす」ことは難しいと考える^⑩。

二 「日本型」と「中国型」の説明文を書く

1 説明文を書くための「てびき」

『かがくのとも』を読ませたのは、「読書量を増やす」こと以外にもう一つ目的があった。「日本型」と「中国型」の説明文を創作する題材選びである。

本来、説明文を書くためには、入念な取材や観察・実験などをしなければならない。しかし、本学習は取材よりも、いろいろな「書き方」で説明文を創作することを主な目的にした。そこで、取材の代わりに『かがくのとも』から説明文を書くために必要な情報を選び取らせた。

そこで、説明文を書くための「てびき」をプリントした(1)。「てびき」を読むことで、これからの学習の見通しをもたせるためである。

※〈子どもたちに配った「てびき」〉

「日本型」「中国型」の説明文を書くためのてびき

①説明文のテーマを何にするか考える。書くためのデータを集める。

○はじめから、実験などをして調べてもよいが、時間がかかるので、『月刊 かがくのとも』を使うとよい。『かがくのとも』を読んで情報を得る。おもしろい・使えると思ったことはノー

トにメモをする。

○『かがくのとも』一冊で足りない場合は、二冊以上使ってもよい。

○また、『かがくのとも』だけでなく、「百科事典」やほかの科学絵本を使ってもよい。

○その際、必ず「本の題名」「著者名(書いた人)」「出版社」「初版年」をノートに記録しておくこと。説明文ができあがったときの参考にした本(「参考文献」として、重要になる。

○※人が書いたものを断りもなく勝手に使うと法律により罰せられます。何を参考にしたかは必ず書く。

○使いたい絵や写真を考えておく。

(この場合も、「本の題名」「著者名(書いた人)」「出版社」「初版年」をノートに記録しておくこと。) インターネットに無料で使える写真もある(これは、先生とする。)

②本文を書き始める。

○はじめからいい作品はできないので、まずノートに書いてみる。ただし、日本の説明文・中国の説明文の「書き方」を大切にして書く。

③清書をする。

○ノートにできあがりを作る。(先生ももちろん見ます)

○パソコンで活字にした説明文を作りたいと思っています。その際に絵や写真を入れます。

④できあがり

○六年生がお互いに読み合います。いいところを見つめます。

書くことが得意な子どもには「てびき」を見させ、できるだけ自力で進めさせた。書くことが苦手な子どもには指導者が「てびき」を解説をしながら説明文を創作させた。「てびき」があることによって、個に応じた指導をすることができた。

なお、著作権についてはしっかりと指導をした。子どもたちが、社会に出たときに無断使用をしないためである。

2 説明文の「書き方」を分析する

「てびき」の配布と同時に『はたらくじどう車』と『汽車の物語』の「書き方」を分析をした。説明文を創作するひな型にするためである。

『はたらくじどう車』は、バス、コンクリートミキサー車、ショベルカー、ポンプ車の四種類を例に挙げて、パターンで説明していることや、「ですから」の接続詞が重要な役割を果たしていることを確認した。

※〈板書記録3〉

『はたらく じどう車』

①何について述べるか

特にどのことか

②特長・説明

例 バス

(じどうしゃ)
(つかいみち)

おきやく

←

つりかわ

手すり

←

きまつたじこ

くにみちをは

しる

コンクリート

ミキサー車

生コンクリート

トをはこぶ

←

大きな

ミキサー

かたまらない

ようにミキサー

車をぐるぐる

まわす

③もう一つの

特長・せつめい

「中国型」は、物語風になっているので作品によって書き方が全く異なる(註)。そこで、「中国型」説明文の一例として、これまで読んできた『汽車の物語』の書き方を分析をした。

※〈板書記録4〉

『汽車の物語』物語風な説明文

①人物が「もの」(ここでは汽車)を見るきつかけ

②会話 「どうして」調べる

本 (ここでは、本を読む※)

③調べたこと 本文①

④おしえてもらったこと 本文②

⑤(本文①と別の内容)

⑥いままでのことをふまえて夢をみる。

※「本」の代わりに「人に聞く」「インターネット」
をつかって主人公に調べさせてもよい。

〔板書記録3〕〔板書記録4〕も説明文の「書き方」
の「てびき」として配布した。

3 創作した「日本型」と「中国型」の説明文

これらの「てびき」をもとに、「日本型」「中国型」
の説明文をそれぞれ創作させた。本稿では、C児が創作
した「へちま」の説明文を挙げる。

参考にした科学絵本は、『へちま』である¹⁸⁾。
はじめに「日本型」の説明文を挙げる。

「へちま」(日本型)

みなさんは、へちまのことを知っていますか。

へちまは、春にたねを植え、何日かたつとめがでて
きます。

それから、少したつと二つの葉っぱのまん中からつ
ると大きな葉っぱもでます。

しばらくすると、つるがのびてきます。へちまのそ
ばにくきをささえるぼうをさします。

そうすると、まきひげというつるがへちまをささえ
てくれます。

くきはたおれず上へのびていきます。
へちまは花がしばむと小さな実がでてきます。

へちまは、たわしになります。

大きくなったへちまの実を水につけて、三日ぐら
いたつとかわがくさりやす。水であらいながすときれ
いとれます。

そして、日にあててほすとからからになります。し
つかりかわいたら、短く切ります。切れたらへちまた
わしのできあがりです。

へちまたわしは、体をあらったり、そうじに使った
りできます。

へちまは、切ってみると、あなが四つあいていて、
れん根のようです。

へちまは、料理にもなります。

へちまのいためものやへちまじる、へちまのつけ物
などができます。

きゅうりぐらいの大きになると食べられるように

なりません。

たわしを作るときの大きさは、大根ぐらいです。

へチマは、はだにやさしいひやけぐすりになります。

へチマのくきを切るとぼたぼたと、水てきがでてきます。それがへチマすいです。根からすい上げたきれいな水です。

日やけた顔などにつけると気持ちいいです。

このようにへチマには、いろんな使い方があるので、す。

『はたらくじどう車』ほど、整っていないが、接続詞を使うなどして「日本型」に近づけようとしている。

次に、「中国型」に書き換えた説明文を挙げる。「さとしくん」がへチマを育てる説明文を創作している。紙面の都合、一部省略をする⁽¹⁴⁾。

「へチマせい長日記」(中国型)

春、小学二年生のさとしくんは、へチマをそだてることにしました。それで、「へチマせい長日記」をつけることにしました。

春に、さとしくんは、いえのにわにへチマのたねをうえました。それから、毎日さとしくんはわすれず、

水をやりました。四日後、さとしくんがにわを見るとへチマのめがでていました。

その日の日記は、「今日、にわを見るとへチマのめがでていた。」と書きました。(中略)

さとしくんはどうしてへチマをそだてようとしたのでしょうか。

ある日、いえでへチマのりようりが出て、そのりようりがすきになりました。さとしくんは、おじいちゃんにへチマのそだてかたをきいて、はじめからそだててへチマのりようりを作ってもらうことにしました。

(中略)

夏のもつともあつい日、きゅうりの何ばいも大きい、ずっしりおもしろいへチマがぶらさがっていました。

さとしくんはとることにしました。はさみでへチマをぶらさげている部分を切ると、すごく重く、さとしくんは、「どうしてこんなに重いのにぶらさげているおちないんだろう」とふしぎに思いました。

さとしくんは、たるに水を入れへチマを水につけました。三日ぐらいたつとまわりのかわがくさつていました。そして、水であらいながすと、かわがかんたんにとれました。それにたねもでてきます。へチマを日にあてかわかして、かわいたらみじかく切つてできあがりです。切つてみると四つのあながあいています。

へチマりようりは、おかあさんがつくってくれました。かぞくみんなでおいしく食べました。

この日、さとしくんは、ゆめをみました。しよう来、さとしくんはへちまのお店をひらいて、へちますいやへちまたわし、へちまりようりをたくさんの人につかってもらってよろこんでいるのでした。それもさとしくんが自分でつくったへちまです。

必要な情報を『へちま』から取り出し、それぞれの説明文として再構成をしている。

例えば、両説明文とも「へちまたわし」のことを述べている。「水につける」と「三日」で「かわがとれる」と、同様の内容ではあるが、書き方が異なるため読み手に違う印象を与える。

4 創作した説明文を互いに評価をする

創作した「日本型」「中国型」の説明文を他の子どもたちに読ませ、評価を書かせた。評価を書くときには、説明文のいいところを引用するようにした。

※「日本型」説明文『へちま』の評価

(D児) ・へちまの使い道を書いていておもしろい。「たわしになります」「料理にもなります」とかがおもしろいです。

(F児) ・へちまの説明をわかりやすく書いていていい。

※「中国型」説明文『へちませい長日記』の評価

(G児) ・毎日の日記を書いていて、その日のへちまの成長がわかりやすい。例えば「今日、へちまのみがたくさん。ちいさいけどでてきた。」など。

(H児) ・へちまでどんなことができるのかなどいろいろ書いてあっていい。

それぞれの評価に対して、作者(C児)に感想を書かせた。(D児へ)とは、D児に対する感想。

※「日本型」説明文

(D児へ) ・へちまの使い方の方のところがおもしろいか書いてくれて良かったです。

(F児へ) ・へちまの説明で、どういう説明がわかりやすかったか書いてくれたら良かったです。

※「中国型」説明文

(G児へ) ・日記でへちまの成長の所をほめてくれて良かったです。

(H児へ) ・もっとくわしく書いてくれたら良かったです。

5

「五つの提案」を視点に分析

―「必要な情報をみつける」「討論・対話」「根

拠・理由・意見の三点セット」について―

まず、「必要な情報をみつける」についてである。『へちま』を「説明文を書くため」という観点で読ませた。これが「必要な情報をみつける」にあたる。『へちま』を「読み物」としてではなく、情報が詰まった「資料」として読ませたのである。「資料」から必要な情報を取捨選択をさせているのである。

なお、今まで説明文や物語・文学教材で行われた「筆者の言いたいこと」「気持ちがわかる」などを見つけるという発問も「必要な情報をみつける」になる。もちろん、これらでもよい授業はできるが、今までの国語の授業は、この発問だけが行われていた。

本実践のように、「書くために必要な情報」というように観点を変えることで、これまでとは違った角度で作品を読むことができる。そのためには、「批判的な読み・評価的な読み」をふまえた発問をすることが必要である。なお、先に挙げた「日本型」「中国型」という観点で説明文や科学絵本を読むことも、今までと違った「必要な情報をみつける」にあたる。

「討論・対話」は、音声で行われると思われがちであるが、往復書簡のように文章を媒介にした「対話」もある。

本実践でも文章での対話をめざした。C児の説明文をDとG児が評価し、作者のC児がその評価について感想

を書いている。F児が「へちまの説明をわかりやすく書いていい」と評価をしたことに対して、C児は「どういう説明がわかりやすかったか書いてくれたら良かったです」と答えている。短い「対話」になっている。この「対話」によってF児は評価する時には具体的な例を挙げて述べればよいということを学んだことになる。しかし、反省点がある。対話が短すぎたということである。往復書簡のようにもつと続けていけばより深い内容になったと考える。

最後に「根拠・理由・意見の三点セット」である。「評価」をするときに、「何がよかったのか（意見）」。どの部分がよかったのか、本文を引用する（根拠）。「なぜいいと考えたのか（理由）」の三つをふまえて述べると説得力が出てくる。G児の評価を例に挙げる。

「毎日の日記を書いていて（理由）、その日のへちまの成長がわかりやすい（意見）。例えば「今日、へちまのみがたくさん。ちいさいけどできてきた。」（根拠）。※（ ）内は筆者

G児が「わかりやすい」と評価したのは「日記」という形式を使ったことであるというのがわかる。

しかし、ここにも反省点がある。「毎日の日記を書いていて」という「理由」だけでは説得力に乏しいことで

ある。

例えば、以下のように書いてあればより分かりやすい。「発芽から、実がなるまでのことが毎日の日記になっているので、ヘチマのことを知らない人が読んでも成長がわかりやすい。」ここまで書くように指導する必要であった。また、「根拠」を示すための「引用」が少ないという点もある。

三 授業をおえて

日中の説明文の「書き方」を比較して読み、それぞれの説明文の創作をさせた。書き方が全く違う説明文を使うことで、作品を様々な観点で読み、創作をすることができたと考える。

また、他国の教材を扱うことで国際理解教育の一端を担えたと考えている。近年、フィンランドの国語教科書が出版されている⁽¹⁵⁾。諸外国の教材を教室に導入することで国際理解はもちろん、日本の文化を再認識できると考える。

おわりに

本実践は、「五つの提案」をふまえた授業である。

「五つの提案」は、「物語・文学教材」を前提にしたものであるが、今回の実践で「説明文教材」はもちろん国

語科全体に広げて応用できる可能性が見いだせた。

今後も「五つの提案」に取り組みたいと考えている。

特に、国語教育の中であまり行われていなかった「批判的な読み・評価的な読み」を中心に授業を展開していきたいと考えている。

注(1) 拙稿「PISA型「読解力」に対応した国語科の授業―

物語・文学教材を中心に―」(『島根大学大学院教育学

研究科「現職短期1年コース」課題別研究成果論集 第

1巻(平成21年度)』p36~40)

(2) 課程教材研究所『語文』一年下p15~16(人民教育出版社

社 小学校語文課程開発センター編著(2001)

(3) 「ピン音」は日本語の「読みがな」にあたる。

(4) 全文訳は以下の通り

③ 汽車の物語(訳・李楊 補訳・岡卓志)

明ちゃんは、お父さんと一緒にピクニックに行きました。

一列になった汽車が、ものすごくスピードで走っていきま

した。／／「すごく長い汽車だよ。一両、一両、全部、つ

ながっているね。あの汽車は、どうやって動いているの」

と、不思議そうに明ちゃんは聞きました。「自分で調べて

みるといいよ」と、明ちゃんのお父さんが言いました。／

／明ちゃんは、本で、汽車について調べました／一両、一

両、つながつて走るの、機関車があるから走るのです。

一番最初に使われた機関車は、蒸気機関車です。／その

後、内燃機(エンジン)がつけられて、内燃機関車が作ら

れました。それから、電気で走る汽車やリニヤモーターカーなどが、発明されました。これらの汽車は、とても速くて、しかも環境にやさしいので「グリーン・エコ型」の汽車といわれています。／「中国の汽車のスピードは、どんな速くなっているんだよ。北京から上海に行くのに、朝出発すれば、夕方には着くんだよ。」と、お父さんが、明ちゃんに教えてくれました。／お父さんは、こうも言いました。「わが国では、今、世界一高い所にある鉄道（青蔵鉄道）をつくっているんだよ。もしこの鉄道ができれば、汽車は、「世界の屋根」と言われているチベットの山までいけるそうだよ。これは、すごいことなんだよ。」／この日の夜、明ちゃんは夢を見ました。明ちゃんが汽車の運転手となって、最新式の高速汽車の運転手として、母国の大地を走っている夢です。

- (5) 教育出版『ひろがる言葉 小学国語』一年下より
- (6) 福音館書店より出版
- (7) 佐藤雅彦＋ユーフラテス『なにかがいたる』(月刊 科学絵本「かがくのとも」 福音館書店 二〇〇九)
- (8) 菊池日出夫『みんなであうどんづくり』(月刊 科学絵本「かがくのとも」 福音館書店 二〇〇九)
- (9) 二〇〇九年のPISA調査の結果から「趣味で読書をすることはない」と答えた日本の子ども(高校一年生)は、四四・二%。OECDの平均が三七・四%であり、オランダの四八・六%ついで二番目に多い。また、「読書は時間のムダだ」と考えている日本の子どもは一五・

二%であり、OECDの平均二三・二%と比べてかなり低い。

国立教育施策研究所編『生きるための知識と技能4 OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 2009年調査国際結果報告書』p98~103(明石書店 二〇一〇)

- (10) 授業に読書を取り入れた授業は大村はまの実践が有名である。読書については『大村はま国語教室』第七卷(筑摩書房 一九八四)に詳しい。
- (11) 「てびき」については、大村はまの実践を参考にした。『大村はま国語教室』(全一五巻別巻一 筑摩書房 一九八二~一九八五)を参照

- (12) 二年下で扱われる『植物妈妈有办法』(植物のお母さんの知恵)では、植物を「お母さん」、種子を「子どもたち」と擬人化している。例えば「タンポポのお母さんは(子どもたちに)パラシュートを用意している。」と書かれている。他に、オナモミ、えんどう豆の知恵が物語風の説明文で紹介される。なお、『火车的故事』は、読解も学習をするが、漢字の読み書きにより重点を置いているようである。
- (13) 吉見律子『へちま』(月刊 科学絵本「かがくのとも」福音館書店 二〇〇七)
- (14) 約一八〇〇字の説明文を創作した。

- (15) メルヴィン・バレー／マルック・トツリネン／リトバ・コフスキー著、北川達夫訳『フィンランド・メソッド普及会訳・編』『フィンランド国語教科書』、(経済界、「小学4年

生「二〇〇五」、「小学3年生」二〇〇六、「小学5年生」二〇〇七）。

〈付記〉

中国の説明文については、筆者が島根大学大学院に在学中に知り得たものである。当時の院生、李楊、馬婷、揚玉萍の三氏には、訳をはじめ中国の国語教育について丁寧教えていただいた。また、島根大学副学長・足立悦男先生には、日・中説明文の教材としての可能性を教えてください、書き換えた説明文についてご指導をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。